

歷史的分野

比較表

歴史的分野 比較一覧表

項目	教科書会社	育鵬社	帝国書院	東京書籍	ページ
大陸文化の伝来		P 3 5	P 2 7	P 3 7	1
東大寺		P 4 8	P 4 0	P 4 6	2
古事記・日本書紀・万葉集		P 4 8	P 4 1	P 4 7	3
神話		P 5 0	P 4 1	P 5 8	4
元寇後 (幕府のおとろえ)		P 7 9 ,	P 6 3	P 7 7	5
河原者		P 9 2	P 8 2	P 8 7	6
朝鮮出兵 (侵略)		P 1 1 1	P 9 7	P 1 0 9	7
安土・桃山の庶民・民衆の文化		P 1 1 3	P 1 0 1	P 1 1 1	8
身分制度 (江戸)		P 1 2 3	P 1 1 6	P 1 1 5	9・10
江戸時代の学問・思想		P 1 4 4 ~	P 1 3 2 ~	P 1 3 0	11
身分制度 (明治)		P 1 6 9	P 1 5 9	P 1 6 1	12
琉球一沖縄		P 1 7 2	P 1 6 8	P 1 6 9	13・14
大日本帝国憲法		P 1 8 4	P 1 7 4	P 1 7 2	15
教育勅語		P 1 8 5	P 1 7 4	P 1 7 3	16
日露戦争後		P 1 9 2	P 1 8 2	P 1 7 9	17・18
韓国併合		P 1 9 2	P 1 8 2	P 1 8 0	19・20
三・一、五・四運動		P 2 1 4	P 2 0 0	P 2 0 4	21・22
水平社		P 2 1 7	P 2 0 7	P 1 9 0	23
日中戦争		P 2 2 9	P 2 2 0	P 2 2 0	24・25
太平洋戦争 (大東亜戦争)		P 2 3 4	P 2 2 5	P 2 2 5	26・27
日本の占領政策 (皇民化政策)		P 2 3 8	P 2 2 7	P 2 2 8	28
沖縄戦		P 2 3 9	P 2 3 1	P 2 2 9	29
日本国憲法		P 2 5 5	P 2 4 0	P 2 4 4	30・31
日米安全保障条約		P 2 5 9	P 2 4 4	P 2 4 8	32
東日本大震災		P 2 7 2	P 2 6 0	P 2 6 2	33

大陸文化の伝来

	育鵬社 (P35～)	帝国書院 (P27～)	東京書籍 (P37～)
教科書の記述	・大陸との関係が深まると、戦乱の続く朝鮮半島や中国から多くの人々が一族でわが国に移り住むようになりました。この人々を^a倭化人(渡来人)といいます。朝廷や各地の豪族は、すぐれた知識や技術をもった^a倭化人を手厚くむかえ入れました。 その結果、わが国には大陸の文化が数多くもたらされました。鉄製の農具や武器、須恵器とよばれるかたい土器の焼き方や機織りの技術、かんがい用のため池をつくる工法、さらには漢字や儒教なども伝えられました。	・戦乱の多い中国や朝鮮半島から、倭国に移住してきた人々を^b渡来人とよびます。^b渡来人は、土器(須恵器)や鉄器の製造や機織、漢字など、毎日の生活に役だつ多くの技術を伝えました。さらに、ヤマト王権においても外交や政治、財政などで活躍しました。6世紀には、仏教や儒教を伝え、日本の人々の信仰や文化に大きな影響を与えました。	・朝鮮半島との交流の中で、半島から日本列島に、一族で移り住む人々が増えました。こうした^c渡来人は、農業用のため池を造る技術のほか、高温で焼く、かたく黒っぽい土器(須恵器)や鉄製の農具、上質の絹織物を作る技術を伝えました。^c渡来人はまた、漢字や儒学、さらに6世紀半ばには仏教を伝えたほか、朝廷の記録や財政に当たったり、外国への手紙を作ったりするなど、さまざまな面で活躍しました。
比較	〔下線部A〕 倭化人(渡来人)と記述されている。朝廷や各地の豪族は、手厚く迎え入れたと記述されている。	〔下線部B〕 渡来人と記述されている。	〔下線部C〕 渡来人と記述されている。

	育鵬社 (P48～)	帝国書院 (P40～)	東京書籍 (P46～)
教科書の記述	・^a聖武天皇は、<u>仏教をあつく信仰し、仏の力を広めることで社会の不安をなくし、国を平安に導こうとした</u>。そこで聖武天皇は、国ごとに国分寺と国分尼寺を建て、都には東大寺を建てました。東大寺には、唐やインドにもない巨大な金銅の仏像（大仏）がつくられました。これは多くの人々の協力や寄付に支えられて完成したものでした。また、^b行基のような民間に仏教を広めながら、各地で用水路や橋をつくる僧もあられました。	・^c聖武天皇と妻の光明皇后は、政治の力や古くからの神への信仰だけではわざわいを防げないと考え、仏教の力で国を守り、不安を取り除こうとしました。そこで、^d行基など、<u>仏教の教えにもとづいて橋やため池などをつくり民衆の信頼を得ていた僧侶たちの協力を得て、都に東大寺を建て、地方には国ごとに国分寺と国分尼寺をつくりました。</u>	・^e聖武天皇と光明皇后は、<u>仏教の力にたよって、伝染病や災害などの不安から国家を守ろうと</u>考え、国ごとに国分寺と国分尼寺を、都には東大寺を建て、東大寺に金銅の大仏を造らせました。当時の僧は、税や刑罰を免除されるなど、国家から保護を受けていましたが、そのかわりに国家を仏教の力によって守るように命じられていました。一方で、^f行基のように一般の人々の間で布教し、<u>人々とともに橋や用水路を造る僧も現れました。</u>
比較	〔下線部A〕 聖武天皇が国を平安に導くために、国分寺・国分尼寺とともに大仏を造立しようとしたと記述されている。 〔下線部B〕 行基の業績について触れているものの、①行基が私度僧であり、当初朝廷は、民衆を扇動する人物であると疑ったこと、②やがて行基の活動は反政府的ではないと朝廷が判断するに至ったこと、③大仏造立に協力させたことが記述されていない。	〔下線部C〕 国分寺・国分尼寺の建立や大仏の造立には聖武天皇に加えて光明皇后の意思が働いたことが記述されている。当時政治の中枢にいた光明皇后の兄弟（藤原武智麻呂・房前・宇合・麻呂）が相次いで病死するとともに、藤原広嗣が九州で反乱をおこすなど政治的な社会不安を取り除くために、既存の信仰ではなく、仏教の力にすがろうとしたことを推測させるものである。 〔下線部D〕 大仏を造立するために、行基に協力を求めたと記述されている。	〔下線部E〕 聖武天皇のみならず、光明皇后も、仏教の力で国家を守ろうと考えていたことが記述されている。 〔下線部F〕 行基の業績について触れているものの、大仏造立に協力させたことが記述されていない。

育鵬社 (P48～)	帝国書院 (P41～)	東京書籍 (P47)
・ 律令国家としての基礎ができあがるにつれ、わが国の歴史が書物としてまとめられるようになりました。^a神々の物語や代々の天皇の業績を記した『古事記』や、国の正史として代々の天皇やその業績を記した『日本書紀』がそれにあたります。 ・ 一方、和歌もさかんになり、日本古来の歌を集めた『万葉集』が、大伴家持らによって編さんされました。^b柿本人麻呂、山上憶良、山部赤人などのすぐれた歌人たちが、自然や恋愛を題材にしてよんだ歌には、当時の人々の感情がよく表されています。	・ 天皇が日本を治めることの正統性を明らかにしようとする動きも起こり、^c天皇家の由来を説明するための歴史書として『古事記』や『日本書紀』がつくられ、^dかずかずの神話がそこへ記されました。 ・ 都に住む天皇や貴族の間では文字を使って歌をよむことが教養として重視されました。大伴家持がまとめたといわれる『万葉集』には^e日本語の音を漢字で表す万葉がなが使われ、柿本人麻呂や山上憶良などの歌人や農民、防人がつくった和歌もおさめられました。	・ 国家の仕組みが整い、国際的な交流が盛んになると、日本の国のおこりや、天皇が国を治めてきた歴史を確かめようとする動きが起きました。^f神話や伝承、記録などを基にした歴史書の「古事記」と「日本書紀」、地方の国ごとに、自然、産物、伝説などを記した「風土記」がまとめられました。 ・ また、和歌も盛んになり、奈良時代の末に大伴家持がまとめたといわれる「万葉集」には、^g天皇や貴族だけでなく、防人や農民の歌も収められています。
【下線部A】 『古事記』を神話と天皇の業績を記した書物、『日本書紀』を国の正史として、記紀の特徴の違いについて記述されている。 【下線部B】 歌人として、柿本人麻呂、山上憶良、山部赤人などが記述されている。	【下線部C】 記紀は歴史書であるとともに、双方に神話が記されていると記述されている。 【下線部D】 万葉がなが使われていることについて記述されるところともに、柿本人麻呂、山上憶良のほかには農民、防人の和歌がおさめられていると記述されている。	【下線部E】 「古事記」「日本書紀」が、神話や伝承、記録を基に書かれた歴史書と記述されている。 【下線部F】 編纂者（大伴家持）の名前は上がっているが、歌人の名前がみられないものの、防人や農民の和歌が収められていることについて記述されている。

育鵬社 (P50～)	帝国書院 (P41～)	東京書籍 (P58)
歴史スームイン「神話に見るわが国誕生の物語」 ・わが国に現存する、<u>最古の歴史書</u>とされる『<u>古事記</u>』『<u>日本書紀</u>』は、<u>神々の物語から始まります</u>。 ・カムヤマトイワレヒコノミコトは<u>畛傍山</u>のふもとの<u>橿原</u>で即位し、<u>初代神武天皇</u>となるという<u>物語</u>です。なお、2月11日の「<u>建国記念の日</u>」は、<u>神武天皇が即位したとされる日</u>を記念したものです。 ・<u>第12代景行天皇の皇子・ヤマトタケル</u>は、.. ・わが国の成り立ちを、神話として説明しようとしたが、それはギリシヤやローマをはじめとして、古今東西のあらゆる国に共通した試みだといえます。 神話に書かれていることは、歴史の事実そのものとはいえませんが、当時の人々の、日本の国の成り立ちについての解釈や生活のようす、ものの考え方、感じ方を知るうえで貴重な手がかりとなっています。	・<u>日本の神話</u>は、<u>国はどのようにして生まれたのか</u>、<u>農作物はどのようにすれば豊作になるのか</u>、<u>などと神の存在とが結びつけられた形で</u>、<u>古代の人々に伝わっていました</u>。文字が伝わる前は、人が人に語り継いで伝えていたため、伝える人や地域によって神話の形も変わっていきまし た。これらの神話を文字にし、記録したのが『古事記』や『日本書紀』です。<u>神と人を結ぶ初代天皇として伝えられる神武天皇が記されているように</u>、<u>天皇家の由来や国の成立がこれらの書物の中で説明されています</u>。一方で日本の神話の内容には、<u>東アジアや太平洋地域</u>、また<u>ヨーロッパの神話と似ているものがあり</u>、<u>ほかの国の古代の人々と共通する考え方をうかがい知ることが</u>できます。 神話は現在も神事や神楽などに受け継がれ、さまざまな地域で独自の神楽が行われています。	深めよう「現代に受けつがれる神話」 ・<u>日本の神話は、朝廷によってまとめられ、今に伝えられている点に特徴があります</u>。奈良時代にまとめられた「古事記」や「日本書紀」などの書物には、<u>神の子孫が天皇になって国を治めてきたと記録されています</u>...
【下線部A】 『古事記』『日本書紀』を歴史書と記述されている。 【下線部B・C】 カムヤマトイワレヒコノミコトが神武天皇になったや、ヤマトタケルは第12代景行天皇の皇子であるなどが記されていると記述されている。	【下線部D】 神話・神が国の在り方や豊作と結びついて、古代の人々に伝わっていたと記述されている。 【下線部E】 神と人を結ぶのが初代天皇として伝えられる神武天皇が記されていると記述されている。	【下線部F】 日本の神話が、朝廷によってまとめられたという特徴が記述されている。 【下線部G】 神の子孫が天皇になって国を治めてきたと記録されていると記述されている。

元寇後（幕府のおとろえ）

	育鵬社 (P79)	帝国書院 (P63)	東京書籍 (P77)
教科書記述	・鎌倉時代には土地の分割相続が進んだため、しだいに御家人一人当たりの所領は小さくなり、生活はきびしさを増していました。元寇で手柄を立て、新たな恩賞を得ようとした彼らは、所領を質に入れたり、売ったりして戦いの費用にあてました。しかし、元寇は防衛戦だったため、幕府からの恩賞はほとんどなく、御家人たちは不満をつのらせていきました。1297（永仁5）年、幕府は徳政令を出し、御家人たちを借金などから救おうとしましたが、かえって社会を混乱させました。さらにこのころ、<u>A.荘園を襲って、年貢をうばう集団（悪党）が各地に出没しましたが、幕府はこれをうまく取りしめることができず、その権威や信用は失われていきました。</u>	・御家人たちは恩賞を期待して元軍に立ち向かいましたが、防衛戦であったため、幕府は恩賞の領地を十分に与えることができませんでした。また、元軍の襲来に備えて海岸守備は続けられたため、その負担が御家人たちに重くのしかかりました。さらに、武士の領地は分割して相続されるため、しだいに小さくなり、御家人の中には生活が苦しくなる者が出てきました。幕府は、徳政令を出して御家人を救おうとしますが、一時的な効果しかありませんでした。また、<u>B.北条氏の一族だけが広大な領地をもち、幕府の重要な役職をにぎっている状態がめだつようになり、御家人の心はしだいに幕府からはなれていきました。</u>	・幕府の支配を支えていた御家人は、領地の分割相続によって生活が苦しくなり、土地を手放す者もいました。幕府は、御家人が手放した土地を返させる徳政令を出して救おうとしました。しかし、<u>C.モンゴルの襲来に備えるために北条氏の一族に権力を集中させると、幕府への反感が強まりました。</u> ・一方、鎌倉時代後期に全国で交通が活発になると、物資が集まる港を支配して豊かになる武士が現れました。<u>D.経済が発展した近畿地方を中心に、荘園領主や幕府に従わず、年貢をうばう武士も現れ、悪党と呼ばれました。</u>
	〔下線部A〕 鎌倉幕府の権威や信用が失墜した要因として、年貢をうばう集団（悪党）をうまく取り締まれなかったことが記述されている。	〔下線部B〕 御家人の心が離反した要因として、北条氏一族だけが広大な領地をもち、幕府の要職を握ったことが記述されている。	〔下線部C〕 幕府への反感が強まった要因として、北条氏一族への権力集中（得宗専制）があると記述されている。 〔下線部D〕 荘園領主や幕府にしたがわず、年貢を奪う武士（悪党）があらわれたと記述されている。
比較			

河原者

育鵬社 (P92)	帝国書院 (P82)	東京書籍 (P87)
・ 禅宗寺院では枯山水とよばれる石を用いた庭園がうくられました。 【側注】^a庭づくりには、河原者とよばれ差別されていた人々が力を発揮した。	・ 龍安寺などの禅宗寺院では、砂や岩などで自然を表現した枯山水の庭園がつくられ、こうした庭園づくりには河原者がすぐれた手腕を発揮しました。 【人権】のコラム 「庭園づくりで活躍した河原者」 ・ 庭園づくりの名手が登場しました。その名手の多くが河原者とよばれた人々でした。昔は、天変地異・死・出血・火事・犯罪など、通常の状態に変化をもたらすできごとにかかわることを「けがれ」といいました。「けがれ」をおそれる観念は、平安時代から強まり、「けがれ」を清める力をもつ人々が必要とされていきました。しかし、一方で、清める力をもつ者は、<u>異質な存在として、差別を受けるようになり</u>ました。河原者もそうした差別を受けた人々でした。	・ 龍安寺の石庭のような、石や木をたくみに配置した^b庭園が造られましたが、これに力を発揮したのは、<u>河原者と呼ばれていた人々</u>でした。 【歴史にアクセス】のコラム 「河原者たちの優れた技術」 ・ 中世では、自然の状態を変えたり、死や出血などの通常と異なる事態に関わったりすること、ケガレと呼んでおそれました。^cケガレにふれる仕事や、ケガレをもとの状態にもどすキヨメという仕事を職業とする人々は、<u>高度な技術を持ちながらも、おそれられ、差別されて</u>いました。 ・ ^d河原者と呼ばれた人々は、死んだ牛馬の皮を河原でなめしたり、河原の石を利用して井戸掘りや庭園造りに従事したりして、^eケガレにふれると見なされていました。
【下線部A】 庭づくりで力を発揮した河原者が、差別されていた人々であると記述されている。	【下線部B】 庭園づくりに河原者が手腕を発揮したと記述されている。 【下線部C】 河原者がなぜ差別を受けるようになったか、記述されている。	【下線部D】 庭園づくりに河原者が力を発揮したと記述されている。 【下線部E】 中世のケガレとキヨメについて記述されている。 【下線部F】 河原者が差別を受けた理由を、ケガレとのかかわりで記述されている。

	育鵬社 (P113～)	帝国書院 (P101～)	東京書籍 (P111)
教科書記述	・ <u>A</u> 平和な時代をむかえると、人々のあいだには、<u>現世を楽しもうとする活潑な文化が生まれました</u>。17世紀初めに、出雲（島根県）の阿国という女性が京都で始めたかぶき踊りは、各地で人気を集めました。この芸能は、のちに歌舞伎として完成されていきます。琉球（沖縄県）から伝わった三味線に合わせて物語を語る、浄瑠璃や小歌も人々の楽しみとなりました。また、小袖とよばれる動きやすい衣服が普及し、その色彩も豊かになりました。麻のかわりに木綿の衣服が広まったのもこのころです。	・ <u>B</u> いっ戦乱にまきこまれるかわからない状況のなかで、百姓や町人の間に今を楽しもうとする<u>気風が強まりました</u>。このような気風のなか、小唄や踊りも流行し、出雲（島根県）の阿国によって歌舞伎踊りが始められ、女性や子どもなどもふくめ、広く人気を集めました。また、中国起源である琉球の三線をもとに三味線がつくられ、その演奏に合わせて語られる浄瑠璃や、人形あやつりと結びついた人形浄瑠璃が完成しました。武士の間では、将棋・囲碁・双六なども広まりました。また、麻にかわって通気性が良く、染めやすい木綿の人氣が高まり、普及し始めました。さらに木綿を色あざやかに染めた小袖も登場しました。	・ <u>C</u> 社会全体に、現実の生活を楽しむ<u>風潮が強まり</u>、恋愛などをうたう小歌が流行し、室町時代に琵琶などに合わせて恋物語などを語った浄瑠璃が、琉球（沖縄県）から伝わった三線（さんしん）を基に創られた三味線に合わせて語られるようになりました。17世紀初め、出雲の阿国という女性が始めたかぶき踊りも人気を集めました。衣服では、着物の下に着ていた小袖を日常的に着るようになり、木綿があさにかわる庶民の衣料として広がり始めました。
比較	〔下線部A〕 庶民・民衆の文化が生まれた背景が、「平和な時代の到来」と記述されている。	〔下線部B〕 庶民・民衆の文化が生まれた背景が、「いっ戦乱にまきこまれるかわからない状況」と記述されている。	〔下線部C〕 庶民・民衆の文化が生まれた背景が、「現実の生活を楽しむ風潮」と記述されている。

朝鮮出兵 (侵略)

	育鵬社 (P111)	帝国書院 (P97)	東京書籍 (P109)
教科書の記述	・全国を統一した秀吉は、<u>A</u>国力のおとろえつつあった明にかわり、日本を東アジアの中心とする<u>新しい国際秩序をつくる</u>うとしました。<u>フイリピン</u>や台湾に服属を求めるとともに、明に出兵しようとしていました。1592 (文禄元) 年、秀吉は<u>B</u>明への案内役を断った朝鮮に15万あまりの大軍を送りました。	・秀吉は全国統一を果たしたのち、<u>C</u>さらに領土を広げるため、明にかわって東アジアを支配しようと考えました。 朝鮮には明を征服するための協力を求めました。朝鮮がこれを拒否すると、1592 (文禄元) 年に15万人の大軍で朝鮮へ攻め入り、秀吉軍は首都の漢城 (現在のソウル) など各地を占領しました (文禄の役)。	・朝鮮、高山国 (台湾)、ルソン (フィリピン) などには手紙を送り、服属を求めました。 1592 (文禄元) 年には、<u>E</u>明の征服を目指して、諸大名に命じ、15万人の大軍を朝鮮に派遣しました。
比較	〔下線部A〕 明にかわって、日本を東アジアの中心とする新しい国際秩序をつくるうとすると記述されている。 〔下線部B〕 朝鮮出兵は、明への案内役を断ったためと記述されている。	〔下線部C〕 明にかわって東アジアを支配し、領土を広げるためと記述されている。 〔下線部D〕 朝鮮には明を征服するための協力を求めたが、拒否されたため、攻めた」と記述されている。	〔下線部E〕 明の征服が目的であったと記述されている。朝鮮に対しては、服属を求めたことが記述されている。

	育鵬社 (P123～)	帝国書院 (P116～)	東京書籍 (P115)
教科書記述	・^A百姓・町人とは別に、えた・ひにんとよばれる身分もありました。これらの人々は農業のほか、死んだ牛馬の処理や、皮革製品をつくったり、役目として罪人の世話などを担当し、社会を支えました。一方で、住む場所や服装を制限されるなど、さまざまな面できびしい差別をうけました。	・^B百姓や町人に組み入れられなかった一部の人は差別されることになりました。 ・コラム「人権—差別された人々」 近世の社会にも、中世と同じように、天変地異・死・犯罪など人間がはかりしれないことを、「けがれ」としておそれる傾向があり、それにかかわった人々が差別されることがありました。 差別は非合理的で、支配者につごうよく利用されたものであるといえます。 ロエたとよばれた人々は、農林漁業を営みながら、死牛馬からの皮革の製造、町や村の警備、草履や雪駄づくり、竹細工、医薬業、城や寺社の清掃のほか、犯罪者の捕縛や行刑役などに従事しました。ひにんとよばれた人々は、町や村の警備・芸能などに従事しました。これらの人々は、社会的に必要とされる仕事や役割・文化を担っていたのです。 ・庶民の家でも、^E男の家長を主人とする「家制度」ができあがり、財産や家業などを家長から長男1人が受け継ぐようになりました。また、^F男尊女卑の風潮が社会に根づき、とくに女性は、小さいときは親に従い、結婚して夫に従い、老いて子（長男）に従うことが求められていました。	・^G百姓、町人とは別に、えた身分、ひにん身分などの人々がいました。えた身分は、農業を行って年貢を納めたほか、死んだ牛馬の解体や皮革業、雪駄作り、雑業などをして生活しました。また、犯罪者をとらえることや牢番などの役人の下働きも、役目として務めました。ひにん身分も、役人の下働きや芸能、雑業などで生活しました。 これらの身分の人々は、^H他の身分の人々から厳しく差別され、村の運営や祭りにも参加できませんでした。幕府や藩は、住む場所や職業を制限し、服装などの規制を行いました。これによって、これらの身分の人々に対する差別意識が強まりました。 ・コラム「女性への教え」 江戸時代に広く読まれた「女大学」という書物には、女性の務めとして、結婚したら夫やその親に従うことなどが教訓として書かれていました。^I女性は子を産み、家を守ることだけが期待されていたのです。こうした教えはありましたが、実際には、農村では女性は重要な働き手で、都市でも大名屋敷などに勤め、自立する女性もいました。

比較 〔下線部 A〕 えた・ひにん身分が存在することや、担う役目、差別があったことなどが記述されている。	〔下線部 B〕 百姓・町人以外の被差別者の存在が記述されている。 〔下線部 C〕 差別の非合理性について、記述されている。 〔下線部 D〕 えた・ひにんそれぞれの仕事やその仕事の意義が記述されている。 〔下線部 E〕 家長制ができあがったことが記述されている。 〔下線部 F〕 男尊女卑の風潮が根づいたことが記述されている。	〔下線部 G〕 えた身分・ひにん身分の存在やそれぞれの仕事について記述されている。 〔下線部 H〕 えた身分・ひにん身分の人々が差別されたことや、その原因が幕府や藩の制度によってもたらされたことが記述されている。 〔下線部 I〕 当時の女性観や女性の役割、実際の女性のようすなどが記述されている。
---	--	--

	青騰社 (P144～)	帝国書院 (P132～)	東京書籍 (P130～)
教科書記述	・新しい学問・国学と蘭学 △国学では、日本の皇室が建國からとぎれずに続いていること (万世一系) は、日本が他国よりすぐれている点だと考えられ、こうした考えは幕末の尊王攘夷運動にも影響をあたえました。 ・海防と尊王思想 18 世紀末になると、近海に出没する外国船に刺激を受け、世界の動きにどう対応すべきかについて考える人があらわれました。林孝平は『海国兵談』をあらわして、海外事情を紹介し、海岸防備の必要性を説きました。また、水戸学の会沢正志斎や藤田東湖のように、外国勢力に対抗するためには、皇室を尊び外国を打ち払う尊王攘夷の思想のもとで、国家の再建を急ぐべきだと唱える者もあらわれました。頼山陽の歴史書『日本外史』も広く読まれ、日本人としての自覚をうながしました。	・国学と蘭学 ○国学は当時の社会を批判する考えや天皇を尊ぶ考え (尊王) に結びつき、幕末の尊王攘夷運動に影響を与えました。	・国学と蘭学 ○国学は、天皇を尊ぶ思想と結び付き、幕末の尊王攘夷運動に影響をあたえました。
比較	〔下線部 A〕 国学では、万世一系が日本の他国よりすぐれている点であると考えられていたと記述されている。 〔下線部 B〕 会沢正志斎、藤田東湖など、他者にはない人物がとりあげられている。また、これらの人物による尊王攘夷思想について記述されている。	〔下線部 C〕 国学が尊王に結びつき、幕末の尊王攘夷運動に影響を与えたと記述されている。	〔下線部 D〕 国学が尊王に結びつき、幕末の尊王攘夷運動に影響を与えたと記述されている。

身分制度 (明治)

	育鵬社 (P169)	帝国書院 (P159)	東京書籍 (P161～)
教科書記述	・ A1871 (明治 4) 年には「解放令」が出され、それまで、えた・ひにんとよばれて差別されてきた人々も平民となりました。しかし、これらの人々への社会的差別は、その後も根強く残りました。	・ 1871 年の布告 (いわゆる「解放令」) によって、江戸時代に差別された人々の呼び名が廃止され、身分・職業も平民と同じとされました。Bこれにより古い身分制度はなくなりましたが、国民全体がすぐに平等になったわけではありませんでした。新政府は、差別されていた人々の生活を改善する具体的な政策をとらず、長く続いた慣習や差別意識も簡単には改まらなかったの で、結婚・就職・居住などに関する差別は根強く残りました。	・ 1871 年には、これまで、えた身分やひにん身分として差別されてきた人々に関して、呼び名を廃止し、身分や職業も平民と同じとする布告 (いわゆる「解放令」) が出されました。Cしかし寒 際には、この後も、職業、結婚、住む場所などの面で差別は根強く続きました。これに対して、「解放令」をよりどころにしながら、差別からの解放と生活の向上を求める動きが各地で起 りました。
比較	〔下線部 A〕 「解放令」が出された後も、差別が残ったことを記述されている。	〔下線部 B〕 「解放令」が出され古い身分制度はなくなったが、すぐに平等にならなかったことを、新政府の具体的な改善政策がなかったことや長年の慣習や差別意識と結びつけて記述されている。	〔下線部 C〕 「解放令」が出された後も、差別が続いたことや差別からの解放と生活の向上を求める動きが起きたことが記述されている。

育鵬社 (P172～)	帝国書院 (P168～)	東京書籍 (P169)
・<u>△台湾に漂着した琉球の漁民の被害事件に対し、清が事件に責任を負えないとしたことから、わが国が台湾に出兵する事件もおきました。</u> <u>△琉球については、日本政府が1872 (明治5) 年に琉球国王の尚泰を琉球藩王として、琉球が日本領土であることを確認し、1879 (明治12) 年に琉球を沖縄県としました (琉球処分)。</u> 「歴史ビュー わが国固有の領土である国境の島々」 <u>尖閣諸島：△尖閣諸島は1884 (明治17) 年から日本人が開拓していました。我が国は慎重に調査したうえで、1895 (明治28) 年に閣議決定によって沖縄県に編入し、領土にしました。今にいたるまで完全に治めています。中国や台湾当局が近年になって領有を主張しています。</u>	・江戸時代の琉球は、幕府や薩摩藩の支配を受ける一方、<u>○清から国王が任命され、欧米諸国からも独立した王国と認められていました。新政府は、琉球を日本領に組み入れようと、1872 (明治5) 年に琉球藩を設置しました。これに対して、琉球は清との関係と王国を維持しようとし、清も琉球藩の設置を認めませんでした。しかし1874年、清領の台湾で琉球の漂流民が殺される事件が起こると、新政府は出兵して清から賠償金を獲得しました。さらに○1879年、軍隊や警察の力を背景に新政府は琉球藩を廃止して沖縄県を設置しました。1895年には尖閣諸島も沖縄県に編入しました。新政府はしばらくの間、学校教育を除いて、琉球王国時代の政策を維持し、米や砂糖などを年貢として納めさせました。農民は、王国時代と変わらない税制に苦しみ、税制の改正や参政権を求める運動も起こしました。また、日本と清は、琉球の所属問題や朝鮮をめぐる問題などで対立するようになりました。</u>	・<u>△琉球王国は、薩摩藩に事実上支配されながら、清にも朝貢するなど、△清の両方に属する関係を結んでいました。日本政府は1872年に琉球王国を琉球藩としました。さらに日本政府は1879年、○軍隊の力を背景に、琉球の人々の反対をおさえ、琉球藩を廃止して沖縄県を設置しました (琉球処分)。朝貢する国を失った△清は日本に強く抗議しました。琉球をめぐる日清間の対立は、日清戦争で台湾が清から日本にゆすりわたされることで自然消滅するまで続きました。</u> <u>琉球処分で沖縄は日本領に編入されましたが、それまでの土地制度や租税制度など古い慣行はしばらく温存されました。しかし、△沖縄の人々に対して、じょじょに本土の風習や文化に合わせさせる同化政策が採られるようになりました。</u>

		・新政府は、1903 年に地租改正を実施し、1912 年に沖縄で初めて衆議院議員総選挙を行うなど、日本化を本格的に進めました。また、人々を「日本国民」にするために日本語の教育を行い、生活様式や習慣も日本人風にする政策を進めました。経済の面では製糖業を育成しました。
比較	〔下線部 A〕 台湾で起きた事件で、清が責任を負えないとしたと記述されている。 琉球の合意のもとで、日本の領土に確定したと記述されている。 〔下線部 B〕 尖閣諸島の帰属について、1884 年から現在に至るまで記述されている。	〔下線部 C〕 江戸時代の琉球が独立していたことや、新政府が琉球を日本領にすることに、清も琉球も反対であったことが記述されている。 〔下線部 D〕 日本が武力を背景に琉球を支配していくことが記述されている。また、尖閣諸島の沖縄県編入についても記述されている。 日本と清の対立についても記述されている。 〔下線部 E〕 沖縄の日本化を推し進めていることが記述されている。
		〔下線部 F〕 琉球が日清両方に帰属していたと記述されている。 〔下線部 G〕 日本が武力を背景に、琉球の人々の反対をおさえたとして記述されている。 〔下線部 H〕 日清の対立が日清戦争後まで続いたと記述されている。 〔下線部 I〕 沖縄の日本への同化政策について記述されている。

	育鵬社 (P184)	帝国書院 (P174)	東京書籍 (P172)
教科書記述	・<u>a</u>この憲法で、天皇はあらためて国の元首と規定され、各大臣の輔弼（助言）と責任により、憲法の規定に従って統治を行うものと定められました。 ・<u>b</u>国民は法律の範囲内で、言論や集会、信仰などさまざまな自由が保障されるとともに、納税、徴兵などの義務を負うことになりました。 《側注》 ・<u>c</u>天皇は、実際には政治的権限を行使することはない、国家統治の精神的よりどころだった。実際の政治は、内閣の各大臣と憲法に規定のない元老とよばれる政治家たちが行った。	・<u>d</u>大日本帝国憲法では、主権は天皇にあると定められ、軍隊を率いる権限や、条約の締結などの外交権、戦争の開始・終結の権限なども天皇にありました。帝国議會・内閣・裁判所のいずれもが、天皇の統治を助けるものとされました。 ・<u>e</u>一方、国民は天皇の「臣民」とされ、国民の言論・出版・集会・結社・信教の自由は、法律の範囲内という厳しい制限がつきながらも認められました。	・<u>f</u>憲法では、天皇が国の元首として統治すると定められました。また、帝国議會の召集や衆議院の解散、陸海軍の指揮、条約の締結や戦争の開始、終丁（講和）などが、天皇の権限として明記されました。内閣については、大臣は、議會ではなく天皇に対して、個々に責任を負うとされました。 ・<u>g</u>また国民は「臣民」とされ、議會で定める法律の範囲内で言論、出版、集会、結社、信仰の自由などの権利が認められました。
	〔下線部A・C〕 天皇は元首として規定されているものの、権限を行使することはなかったと記述されている。 〔下線部B〕 国民には、法律の範囲内であるが、さまざまな自由が保障されていたと記述されている。	〔下線部D〕 天皇に主権があり、軍事力を行使するなど、強い権限が与えられていたと記述されている。 〔下線部E〕 国民は「臣民」と規定され、法律の範囲内という厳しい制限がついて自由が認められていたと記述されている。	〔下線部F〕 天皇は元首として規定され、軍事力を行使するなど強い権限が与えられていたことが記述されている。 〔下線部G〕 国民は「臣民」と規定され、法律の範囲内で自由などの権利が認められたと記述されている。
比較			

教育勅語

	青騰社 (P185)	帝国書院 (P174)	東京書籍 (P173)
教科書記述	・<u>急激な欧米文化の流入にともない、教育界では日本の伝統的な考え方を堅持する動きも生まれ、教育の現場に混乱が生じていました。これに危機感をもった地方長官らの提案をもとに、1890 (明治 23) 年、明治天皇によって教育の指針を示した教育勅語 (教育ニ関スル勅語) が出されました。</u> ・<u>教育勅語は、親への孝行や友人どうしの信義、法を重んじることの大切さなどを説きました。また、国民の務めとして、それぞれの立場で国や社会のためにつくすべきことを示し、その後の国民道徳の基盤となりました。</u>	・憲法発布の翌 90 年、<u>天皇と国への「忠君愛国」および親への「孝」を基本とする教育勅語が発布されました。これは、国民の道徳や価値観の統一に大きな影響を与えました。</u>	・憲法発布の翌年には<u>教育勅語も出されて、忠君愛国の道徳が示され、教育の柱とされるところに、国民の精神的なよりどころとされました。</u>
比較	〔下線部 A〕 教育勅語を発布するに至った時代的背景について記述されている。 〔下線部 B〕 「国民道徳の基盤」 ・親への孝行 ・友人どうしの信義 ・法を重んじることの大切さ ・それぞれの立場で国や社会のためにつくす	〔下線部 C〕 「国民の道徳や価値観の統一」 ・天皇と国への忠君愛国 ・親への孝	〔下線部 D〕 「教育の柱、国民の精神的なよりどころ」 ・忠君愛国の道徳

育鵬社 (P192～)	帝国書院 (P182～)	東京書籍 (P179)
・ 幕末以来、わが国の指導者や国民には、欧米列強の植民地にされるという根強い危機感がありました。^aしかしこの危機感は、日露戦争の勝利で解消し、欧米列強と並ぶ国になったという安心感と自信が生まれました。また、同じ有色民族が、世界最大の陸軍国・ロシアを打ち破ったという事実は、列強の圧迫や、植民地支配の苦しみにあえていたアジア・アフリカの民族に、独立への希望をあたえました。インド独立の父ネルーや、中国革命の指導者孫文は、日本の勝利がアジア諸国にあたえた感動を語っています。また、その後アジア各地でおこった近代化や独立をめざす一連の動きにも、この戦争の影響がありました。日本にはアジア諸国から多くの留学生や独立運動家が訪れ、わが国もまた政府・民間を問わず、彼らを受け入れました。^bその反面、ヨーロッパでは、かつてモンゴル帝国がヨーロッパに侵入したように、黄色人種によって白人優位の体制が揺るがされるのではないかという黄禍論が広まりました。また、アメリカの世論も、日本に対する警戒感を強めるようになりました。	・ 日本が日露戦争に勝利したことは、植民地支配に苦しむアジアの人々に、近代化や独立への希望と自信を与えました。そのため、アジア諸国から日本へ留学・亡命する人が増えました。^c一方、日本人の間には、日清・日露戦争に勝利したことなどによって、日本人はアジアのなかですぐれていると考える人が増えてきました。そして、アジア諸国の期待とは異なり、日本は韓国の植民地化を進め、陸軍・海軍の軍備を増強させるなど、帝国主義国としての動きを活発にしていきました。	・ 日露戦争での勝利によって、日本は列強としての国際的な地位を固めました。^d国民の中には、帝国主義国の一員になったという大国意識が生まれ、アジア諸国に対する優越感が強まりました。 ・ 一方、日露戦争での日本の勝利は、インドやベトナムなど、欧米列強の植民地であったアジアのさまざまな民族に刺激をあたえ、民族運動は活発化しました。しかし、日本は新たな帝国主義国としてアジアの民族に接することになりました。

比較 〔下線部 A〕 戦争に勝利したことで、日本が欧米列強と並ぶ国になったと感じたと記述されている。 〔下線部 B〕 わが国の台頭が、欧州において黄禍論の拡大につながったと記述されている。	〔下線部 C〕 戦争に勝利したことにより、日本人がアジアのなかですぐれていると感じたと記述されている。 〔下線部 D〕 わが国の台頭が、韓国の植民地化など帝国主義政策の活発化につながったと記述されている。	〔下線部 E〕 戦争に勝利したことで、日本人が大国意識とアジア諸国に対して、優越感をもつようになったと記述されている。 〔下線部 F〕 わが国の台頭は、アジア諸国に民族運動の活発化を促したが、日本は帝国主義国として接したと記述されている。
---	--	---

育鵬社 (P192～)	帝国書院 (P182～)	東京書籍 (P180)
・ <u>▲日露戦争が始まると、日本は、その武力を背景に、韓国と日韓議定書を結びました。これは韓国の領土を他国（ロシア）から守るため、日本軍が韓国内に展開することを認めるという内容のものでした。</u> また、日露戦争中には、<u>▲アメリカのフイリピン領有と、日本の韓国保護国化をたがいに支持する内容の合意が日米間で成立しました。さらに、更新された▲日英同盟や、ポーツマス条約でも、韓国に対する日本の保護権が認められました。</u> その後、日韓協約に従って、日本が韓国の外交権をにぎることになり、韓国統監府を置き、初代統監として伊藤博文が赴任しました。やがて統監の権限は内政にまでおよぶことになりました。これに対し、韓国から抵抗運動もおこりましたが、鎮圧されました。 1909（明治 42）年、伊藤博文が満州で韓国人の安重根に暗殺される事件がおこりました。 ▲1910（明治 43）年、政府は韓国併合に踏み切り、その統治のため朝鮮総督府を置きました。欧米列強にも、朝鮮半島の問題で日本に干渉する意図はありませんでした。 わが国の朝鮮統治では、併合の一環として近代化が進められましたが、米の作づけが強いられ、日本語教育など同化政策が行われたので、	・ 1905（明治 38）年、日本は韓国を保護国として外交権を日本の支配下におき、伊藤博文を韓国統監として派遣しました。のちには内政も支配し、韓国の軍隊・警察を解散させました。このため、韓国では、兵士らによる激しい抵抗が各地に広がり、1909年には伊藤が暗殺される事件も起こりました。翌 10 年、日本は韓国を併合し、植民地としました（韓国併合）。韓国を朝鮮と改め、軍人の朝鮮総督を置いて支配し、首都漢城（現在のソウル）も京城と名を変えさせました。日本の支配に対する朝鮮民衆の抵抗は、その後も続きました。 朝鮮では、近代化が進められ鉄道が整備される一方、学校で日本語や日本の歴史・地理が教えられ、朝鮮の文化や歴史を教える機会は減らされました。また、<u>▲土地調査の結果、所有者がいまいな土地は没収されたため、小作人となる者や、日本や「満州」へ移住せざるを得ない者が出ました。</u>	・ 日露戦争の最中から、韓国は、日本による植民地化の圧力にさらされていました。日本は、1905（明治 38）年に韓国の外交権をうばって保護国にし、韓国統監府を置きました。初代の統監には伊藤博文が就任しました。 1907 年には韓国の皇帝が退位させられて、軍隊も解散させられました。<u>●韓国の国内ではこうした動きに対する抵抗運動が広がり、日本によって解散させられた兵士たちは農民と共に立ち上がりました（義兵運動）。これは日本軍に鎮圧されましたが、日本の支配に対する抵抗はその後も続けられました。</u> 1910 年、日本は韓国を併合しました（韓国併合）。韓国は「朝鮮」と呼ばれるようになり、首都の「漢城（ソウル）」も「京城」と改称されました。また強い権限を持つ朝鮮総督府を設置して、武力で民衆の抵抗をおさえ、植民地支配を推し進めました。学校では朝鮮の文化や歴史を教えることを厳しく制限し、日本史や日本語を教え、日本人に同化させる教育を行いました。<u>●植民地支配は 1945（昭和 20）年の日本の敗戦まで続きました。</u>

	朝鮮の人々の日本への反感は強まりました。	
比較	〔下線部 A〕 日露戦争中の日本と韓国との関係は、韓国をはじめ米英も認めていいたと記述されている。 〔下線部 B〕 韓国併合について、欧米列強は日本に干渉する意図はなかったと記述されている。	〔下線部 C〕 1905年から韓国併合後にいたるまで、朝鮮民衆の抵抗が続いたことが記述されている。 〔下線部 D〕 韓国併合の結果、朝鮮の人々の生活がどのように変わったのか具体的に記述されている。
	〔下線部 E〕 日露戦争開始から韓国併合後にいたるまで、朝鮮民衆の抵抗が続いたことが記述されている。 〔下線部 F〕 日本の植民地支配が、日本の敗戦まで続いたことが記述されている。	

育鵬社 (P214～)	帝国書院 (P200)	東京書籍 (P204～)
教科書記述	・日本の植民地の朝鮮では、<u>c</u>民族自決の考え方に刺激を受けた人々が、1919 (大正 8) 年 3 月 1 日、京城 (現在のソウル) で独立宣言を行い、「<u>独立万歳</u>」とさけぶ民衆運動が朝鮮各地に広がり、<u>三・一独立運動</u>。これに対して、朝鮮総督府は、警察や軍隊を動員してようやくおさえた。この運動ののち、日本政府は、朝鮮を武力でおさえる政策を転換して、それまでの軍人による警察制度を廃止し、朝鮮の人々に集会や言論、出版における一定の自由を認めていきました。 ・中国は、<u>ロ</u>二十一か条の要求の取り消しをパリ講和会議で求めました。しかし列強によって退けられ、山東省の利権はドイツから日本へ引きつがれました。これに対して中国民衆の不満が高まり、1919 年 5 月 4 日に北京で学生を中心とする抗議行動が起こり、中国国内に広まりました (<u>五・四運動</u>)。 こうした民衆の団結による抵抗運動の重要性を痛感した孫文は、<u>同</u> 19 年に中国国民党を結成しました。そして、1921 年に結成された中国共産党やソ連と協力して、民族独立と国民革命に向けた動きを強めました。	・大戦後、<u>e</u>中国は山東省の権益の返還を要求しましたが、パリ講和会議で要求が拒絶されると、不満が爆発しました。1919 年 5 月 4 日の北京での学生集会をきっかけに反日運動が起こり、帝国主義に反対する全国的な運動へと発展しました。これを<u>五・四運動</u>といいます。この運動をきっかけに、孫文は中国国民党 (国民党) を結成し、1921 年に結成された中国共産党と協力して、国内の統一を目指しました。 日本は、<u>f</u>ベルサイユ条約で山東省のドイツ権益を引きつぎましたが、1921 年から開かれたワシントン会議の結果、これを中国に返還し、武力よりも経済による進出を重視する政策を探りました。しかし、中国では旅順・大連など、満州の権益の回収を求めて、各地で日本製品の不買運動が続きました。 ・日本の植民地支配の下に置かれていた朝鮮では、<u>民族自決</u>の考えの影響を受けて、1919 年 3 月 1 日、独立を目指す知識人や学生などが、京城 (ソウル) で日本からの独立を宣言する文章を発表し、人々は「<u>独立万歳</u>」をさけんでデモ行進を行いました。これに刺激されて、独立運動は短期間で朝鮮半島全体に広がりました (<u>三・一独立運動</u>)。朝鮮総督府は、武力でこうした動きを鎮圧しました。

・aパリ講和会議で中国の山東省の旧ドイツ権益が日本に引きつがれることが決まると、これに抗議する活動が北京で展開され、やがて全国的に広がりました (五・四運動)。

・一方、b朝鮮でも日本からの独立を求め大規模な集会やデモがソウルでおこり、各地にひろがっていきました (三・一独立運動)。朝鮮総督府は軍隊を出動させて鎮圧しましたが、これ以後、武力中心の統治から、よりおだやかな統治へと変わっていきました。

		この後、朝鮮總督府は朝鮮の人々に政治的な權利を一部認めるなど、統治の方針を転換しますが、日本への同化政策は進めたため、独立運動は続きました。
比較	〔下線部A〕 中国で五・四運動が起きたことが記述されている。 〔下線部B〕 朝鮮における三・一独立運動を日本が鎮圧した後、統治の仕方が武力中心からおだやかなものに変えたと記述されている。	〔下線部C〕 朝鮮における三・一独立運動の経緯やその後の日本政府の対応が、武力でおさえる政策を転換し、一定の自由を認めたと記述されている。 〔下線部D〕 中国における五・四運動のようすが記述されている。また、その影響によるその後の動きについても記述されている。 〔下線部E〕 中国における五・四運動のようすが記述されている。また、その影響によるその後の動きについても記述されている。 〔下線部F〕 ワシントン会議後の日本の中国支配の政策とそれに反発する中国の動きについて記述されている。 〔下線部G〕 朝鮮における三・一独立運動の経緯やその後の日本政府の対応と、朝鮮の独立運動が続いたことが記述されている。

育鵬社 (P217)	帝国書院 (P207～)	東京書籍 (P190～)
・<u>「全国水平社が組織され、部落差別の撤廃を求める運動が本格化しました。」</u>	・<u>「^B「解放令」が出されたのちも、働く条件や結婚などの差別はなくならなかったため、みずから手による部落差別問題の解決をめざして、1922年に全国水平社が結成されました。」</u>	・<u>「^C深めよう「解放令」から水平社へ「解放令」とその後部落改善運動の始まり 島崎藤村の「破戒」</u>
〔下線部A〕 全国水平社の成立と部落差別撤廃運動が本格化したと記述されている。	〔下線部B〕 水平社結成の理由についても記述されている。	〔下線部C〕 1871年の「解放令」から1922年の全国水平社結成まで、約50年間の歴史を、特設ページで詳細に記述されている。
比較		

教科書記述	育鵬社 (P229)	帝国書院 (P220～)	東京書籍 (P220～)
・^a1937 (昭和12) 年7月、条約に基づいて北京に駐屯する日本軍の部隊が、郊外の盧溝橋付近での訓練中に何者かの銃撃を受け、それが中国軍との戦闘に発展する事件がおこりました (盧溝橋事件)。^b 日本政府は不拡大方針をとりましたが、一方で兵力の増強を決定しました。その後も日本軍と国民政府軍との戦闘は終わらず、8月には日本軍将校殺害をきっかけに上海にも戦闘が拡大しました。ここにいたって日本政府は不拡大方針を撤回し、わが国と中国は全面戦争に突入していききました (日中戦争)。日本軍は12月に首都・南京を占領しましたが、蔣介石は奥地の重慶に脱出して徹底抗戦の姿勢をとり、戦争は長期化していききました。 その間、何度か和平交渉が行われましたが、わが国も、米ソなどの援助を得ていた蔣介石も、強硬な姿勢を崩さず、和平にはいたりませんでした。中国戦線の長期化により、わが国の国力はしだいに低下していききました。	・^c日本は国際連盟を脱退し、軍縮条約を破棄してさらに孤立を深めると、同じように国際連盟を脱退したドイツに接近して1936 (昭和11) 年に日独伊防共協定を結び、アメリカやイギリスとの対立を深めていききました。また、「満州」にどこまでも、中国北部にも軍隊を進めていききました。 ^d翌37年7月、北京郊外の盧溝橋で日中両軍が衝突した盧溝橋事件をきっかけに、日中戦争が始まりました。日本軍は中国南部からも侵攻し、上海や当時首都であった南京を占領しました。 ^e南京では、兵士だけでなく多くの民間人が殺害されました (南京事件)。 日本による侵攻が進むなか、中国では、毛沢東の率いる中国共産党が力をつけ、蔣介石の率いる中国国民党 (国民政府) との内戦が続いていました。しかし、^f共同して日本と戦うために対立を一時やめ、1937年9月に抗日民族統一戦線をつくりました。日本軍は、中国を占領していききましたが、それは都市と鉄道という、部分的な支配にすぎませんでした。^g国民政府は、首都を漢口、さらに奥地の重慶へと移し、アメリカ・イギリス・ソ連などの支援を受けて抵抗を続けたため、戦争は長期戦となっていました。	・満州を支配下に置いた日本は、さらに中国北部に侵入しました。中国では、国民政府 (国民党) と共産党との内戦が行われていましたが、抗日運動が盛り上がる中、毛沢東が率いる共産党は、蔣介石を指導者とする国民党に協力を呼びかけ、1936 (昭和11) 年に内戦を停止しました。 ^h1937年7月、北京郊外の盧溝橋付近で起こった日中両国軍の武力衝突 (盧溝橋事件) をきっかけに、日中戦争が始まりました。戦火は中国中部の上海に拡大し、全面戦争に発展しました。これを受けて、ⁱ国民党と共産党は日本との戦争のために協力し合うことを最終的に決め、抗日民族統一戦線が結成されました。 ^j日本軍は、1937年末に首都の南京を占領し、その過程で、女性や子どもなど一般の人々や捕虜をふくむ多数の中国人を殺害しました (南京事件)。 しかし、^k国民政府は、首都を漢口、次いで重慶に移し、アメリカやイギリスなどの支援を受けながら、戦争を続けました。	

比較	〔下線部 A〕 ・盧溝橋事件は、日本軍部隊が何者かに銃撃を受けたことがきっかけであると記述されている。 〔下線部 B〕 ・日本政府の当初の不拡大方針が、拡大した理由と、戦争になったことが記述されている。 〔下線部 C〕 ・和平交渉を行ったが、解決にはいたらならず、国民政府軍への米ソによる援助もあり、長期化したと記述されている。	〔下線部 D〕 ・国際連盟脱退後、日本が中国北部に軍隊を進めていたことが記述されている。 〔下線部 E〕 ・日中戦争の始まりは、盧溝橋での日中両軍の衝突がきっかけであると記述されている。 〔下線部 F〕 ・南京事件について、南京では多くの民間人が被害されたと記述されている。 〔下線部 G〕 ・盧溝橋事件以降に、中国での抗日民族統一戦線がつくられたと記述されている。 〔下線部 H〕 ・戦争の長期化は、国民政府へのアメリカ・イギリス・ソ連などの支援があったからと記述されている。	〔下線部 I〕 ・日中戦争の始まりは、盧溝橋での日中両軍の武力衝突がきっかけであると記述されている。 〔下線部 J〕 ・日本との戦争のため、抗日民族統一戦線が結成されたと記述されている。 〔下線部 K〕 ・南京事件について、日本軍は多数の中国人を殺害したと記述されている。 〔下線部 L〕 ・国民政府は、アメリカ・イギリスの支援を受けながら戦争を続けたと記述されている。
----	---	--	---

太平洋戦争

青騰社 (P234～)	帝国書院 (P225～)	東京書籍 (P225)
教科書記述 ・日米交渉が行きづまるなか、軍部では対米開戦も主張されるようになりました。1941 (昭和16) 年11月、<u>アメリカは、中国やインドシナからの日本軍の無条件即時撤退、蒋介石政権以外の中国政権の否認、三国同盟の事実上の放棄などを要求する強硬案 (ハル・ノート) を日本に提示しました。東条英機内閣は、これをアメリカ側の最後通告と受け止め、交渉を断念し、開戦を決断しました。</u> ・1941 (昭和16) 年12月8日、日本海軍はハワイにある真珠湾の米軍基地を攻撃し、アメリカ海軍の艦隊に壊滅的な損害をあたえました。また、同時にマレー半島に上陸した日本陸軍もイギリス軍を撃破して南下し、シンガポールを占領しました。 ・<u>米英に宣戦布告したわが国は、この戦争を「自在自衛」の戦争としたうえで、大東亜戦争と名づけました (戦後は太平洋戦争とよばれるようになりました)。</u>また、三国同盟によりドイツ、イタリヤもアメリカに宣戦布告しました。これにより、この一連の戦いは日・独・伊などの枢軸国と米・英・蘭 (オランダ) ・中などの連合国との全面戦争となりました。 《欄外》 c.戦後、日本を占領した連合国軍総司令部 (GH	・加えて<u>アメリカは、中国を満州事変前の状態にもどすことなどを求めたため、交渉は決裂し、東条英機内閣と軍部はアメリカと戦う姿勢をかためました。</u> ・1941 (昭和16) 年12月8日、日本軍はイギリス領であったマレー半島に上陸する一方、ハワイの真珠湾にあるアメリカ海軍基地を攻撃しました。日本は、アメリカ・イギリスに宣戦布告し、太平洋戦争 (アジア・太平洋戦争) が始まりました。 《欄外》 e.太平洋戦争はアメリカ側が用いた呼び方で、近年はアジアも戦場であったことから、<u>アジア・太平洋戦争ともよばれています。また、戦争中、日本はこの戦争のことを「大東亜戦争」とよんでいました。</u> ・1942 (昭和17) 年6月のミッドウェイ海戦での敗北以後、日本の戦局はしだいに悪化しました。	・日米交渉の席で、<u>アメリカが、中国とフランス領インドシナからの全面撤兵などを要求すると、近衛内閣の次に成立した東条英機内閣と軍部は、アメリカとの戦争を最終的に決定しました。</u> ・1941年12月8日、日本軍は、アメリカの海軍基地があるハワイの真珠湾を奇襲攻撃するとともに、イギリス領のマレー半島に上陸し、太平洋戦争が始まりました。 《欄外》 o.当時の日本政府は、「<u>大東亜共栄圏</u>」を建設する目的から、「大東亜戦争」と呼びました。また、太平洋だけでなく中国や東南アジアでも戦争が行われたことから、最近では「<u>アジア・太平洋戦争</u>」とも呼ばれます。 ・日本軍は、短期間のうちに、東南アジアから南太平洋にかけての広大な地域を占領しました。しかし、1942年6月のミッドウェイ海戦の敗北によって、日本軍の攻勢は止まり、太平洋戦争は長期戦に入りました。

	Q)が大東亜戦争の名称を禁止したので、太平洋戦争という用語が一般化した。 ・真珠湾での損害のため、アメリカは開戦からしばらく、太平洋方面で攻勢に出られませんでした。そのあいだに東南アジアや西太平洋に進撃した日本軍は、それらの全域を占領しました。 ・日米戦の転換点となったのは、1942 (昭和 17) 年 6 月のミッドウェイ海戦でした。この戦いで日本海軍は多くの航空母艦 (空母) と航空機、優秀なパイロットの大半を失い、これ以後、わが国の戦況は悪化していきました。	
比較	〔下線部 A〕 ハルノートの内容 (中国やインドシナからの日本軍の無条件即時撤退、蒋介石政権以外の中国政権の否認、三国同盟の事実上の破棄) が記述され、それがアメリカ側の最後通告として受け止めた結果、東条英機内閣が開戦を決意したと記述されている。 〔下線部 B・C〕 この戦争を当時の日本が「自存自衛」のために始めたとし、「大東亜戦争」と名づけたと記述されている。また、戦後に「太平洋戦争」と呼ばれるようになったと記述されている。さらに、欄外に戦後GHQによって「大東亜戦争」の名称使用が禁止され、「太平洋戦争」という呼称が一般化したとも記述されている。	〔下線部 D〕 アメリカが満州事変以前の状態に戻すことなどを要求してきたため、内閣と軍部が開戦を決意したと記述されている。 〔下線部 E〕 欄外に「太平洋戦争」という名前はアメリカが名づけたこと、近年は「アジア・太平洋戦争」とも呼ばれていること、当時日本では「大東亜戦争」とよんでいたことが記述されている。
	〔下線部 F〕 アメリカが日本軍の中国とインドシナからの撤退を要求してきたことで、内閣と軍部が開戦を決意したと記述されている。 〔下線部 G〕 欄外に、当時の日本政府では「大東亜共栄圏」を建設する目的で戦争を行ったことから「大東亜戦争」と呼んでいたこと、近年は「アジア・太平洋戦争」とも呼ばれていることが記述されている。	

日本の占領政策（皇民化政策）

	育鵬社 (P238)	帝国書院 (P227～)	東京書籍 (P228～)
教科書記述	・<u>a</u>わが国が統治していた朝鮮半島では、日本式の姓名を名のらせる創氏改名など、朝鮮人を日本人に同化させる政策が進められました。戦争の末期には、朝鮮や台湾にも徴兵や徴用が適用され、人々に苦しみを強いることになりました。日本の鉱山や工場などに徴用され、きびしい労働を強いられる朝鮮人や中国人もいました。	・<u>b</u>日中戦争が進行していくなかで、日本は総力をあげて戦争にのぞいたため、植民地の朝鮮や台湾の人々を「皇国臣民」にする政策を行いました（皇民化政策）。これは、植民地の人々を日本の戦争体制に組み入れることでもありました。太平洋戦争が始まると、皇民化政策は強化され、学校では、「国語」として日本語が教えられ、朝鮮語や中国語の使用が禁止されました。また、皇居に向かっての敬礼や教育勸語の奉読、各地に建てた神社への参拝を強制しました。さらに朝鮮では、日本式の氏名に変えさせる創氏改名が行われ、夫婦別姓であった朝鮮に日本の家族制度がもちこまれることになりました。戦局が悪化すると、朝鮮・台湾の人々へも徴兵を実施しました。	・<u>c</u>日本は、植民地や占領地でも、厳しい動員を行いました。 多数の朝鮮人や中国人が、意思に反して日本に連れてこられ、鉱山や工場などで劣悪な条件下で労働を強いられました。こうした動員は女性にもおよび、戦地で働かされた人もいました。戦争末期には徴兵制が朝鮮や台湾でも導入されました。
比較	〔下線部A〕 朝鮮半島での創氏改名、同化政策について、記述されている。また、朝鮮や台湾の人々に強い重い負担についても記述されている。	〔下線部B〕 朝鮮半島や台湾で行われた「皇民化政策」「創氏改名」について記述されている。また、朝鮮や台湾の人々に強い重い負担について、記述されている。	〔下線部C〕 「創氏改名」「皇民化政策」についての記述はない。朝鮮や台湾の人々に強い重い負担について記述されている。

育鵬社 (P239)	帝国書院 (P231)	東京書籍 (P229～)
・さらに米軍は3月末以降、沖縄に上陸しました。沖縄では、はげしい地上戦がくり広げられ、日本軍は沖縄県民とともに必死の防戦を展開し、航空機による体当たり攻撃（特攻）や戦艦大和による水上特攻も行われました。 米軍も大きな損害を出しましたが、圧倒的な物量による米軍の攻撃で、6月、日本軍は壊滅しました。県民も含めた日本側の死者は18万～19万人にのぼり、その半数以上は一般市民でした。 その中には、中学生や女学生で戦いに従軍して命を落とした人々や、戦闘がはげしくなる中で逃げ場を失い、集団自決に追いこまれた人々もいました。	歴史を探ろう「戦場となった沖縄」 ・アメリカ軍は、沖縄中部一帯を占領し、軍事基地化しました。一方、約10万人の日本軍は4月8日、首里の北側でアメリカ軍を待ち受け、戦いが始まりました。激しい戦いの末、5月末には日本軍は戦闘能力を失い、住民が避難していた沖縄島南部に退きました。^aその結果、多くの住民が日本軍によって、食料をうばわれたり、砲弾のふり注ぐなか、安全な壕を追い出されて犠牲になったりしました。 6月後半、日本軍司令官は自害し、日本軍の組織的な抵抗は終わりましたが、「最後の一兵まで戦え」という命令が残っていたため住民と兵士の犠牲は増え続けました。^c人々が集団死に追いこまれたり、^d禁止されていた琉球方言を使用した住民が日本兵に殺害されたりすることもありました。	・1945年3月、アメリカ軍が沖縄に上陸しました。日本軍は、特別攻撃隊（特攻隊）を用いたり、中学生や女学生まで兵士や看護要員として動員したりして強く抵抗しました。 民間人を巻きこむ激しい戦闘によって、沖縄県民の犠牲者は、当時の沖縄県の人口のおよそ4分の1に当たる12万人以上になりました。その中には、^e日本軍によって集団自決に追いこまれた住民もいました。
〔下線部A〕 米軍の攻撃で、住民が逃げ場を失い、集団自決に追いこまれたと記述されている。	〔下線部B・D〕 日本軍によって住民が犠牲になった例が記述されている。 〔下線部C〕 人々が集団死に追いこまれたと記述されている。	〔下線部E〕 住民が日本軍によって集団自決に追いこまれたと記述されている。

日本国憲法

育鵬社 (P255)	帝国書院 (P240～)	東京書籍 (P244～)
・ GHQは、日本に対し憲法の改正を要求しました。日本側は、大日本帝国憲法は近代立憲主義に基づいたものであり、部分的な修正で十分と考えました。しかし、<u>A GHQは日本側の改正案を拒否し、自ら全面的な改正案を作成して、これを受け入れるよう日本側に強く迫りました。</u>天皇の地位に影響がおよぶことがおそれた政府は、これを受け入れ、日本語に翻訳された改正案を、政府提案として帝国議会で審議しました。議会審議では、細かな点までGHQとの協議が必要であり、議員はGHQの意向に反対の声をあげることができず、ほとんど無修正のまま採択されました。 こうして1946 (昭和21) 年11月3日、日本国憲法が公布され、半年後の1947 (昭和22) 年5月3日から施行されました。 日本国憲法の最大の特色は、交戦権の否認、戦力の不保持などを定めた、他国に例を見ない徹底した戦争放棄 (平和主義) の考えでした。しかし、<u>B 占領が終わり、わが国が独立国家として国際社会に責任ある立場に立つようになると、憲法改正や再軍備を主張する声があがりました。</u><u>この問題については、現在もおお多くの議論が行われています。</u>	・ 日本の民主化のなかで、最も大きな課題は大日本帝国憲法の改正でした。GHQの指示で、日本政府は新しい憲法の制定に着手しました。政府原案ができましたが、<u>C その案では民主化が徹底されていないと判断したGHQは、日本の民間団体などの憲法草案も参考にしながら、みずから草案をつくって日本政府に示し、修正をうながしました。</u>新しい政府案は、議会の審議を経て、1946年11月3日に日本国憲法として公布され、1947年5月3日から施行されました。 日本国憲法は、三つの点で、新しい時代に対する当時の国民の期待がもたらされていました。 ①主権は国民にあること (国民主権)、②戦争をふたたび起こさないこと (平和主義)、③基本的人権を尊重すること (個人の尊厳) です。また、<u>D 天皇はこれまでの主権者という立場から、新たに日本国および国民統合の象徴とされました (象徴天皇制)。</u>	・ 民主化の中心は、憲法の改正でした。日本政府は初めにGHQの指示を受けて改正案を作成しましたが、大日本帝国憲法を手直したものにすぎませんでした。そこで、<u>E 徹底した民主化を目指すGHQは、日本の民間団体の案も参考にしながら、自ら草案をまとめました。</u>日本政府は、GHQの草案を受け入れ、それを基に改正案を作成しました。そして、帝国議会の審議を経て、1946 (昭和21) 年11月3日に日本国憲法が公布され、翌年の5月3日から施行されました。 新憲法は、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義の三つを基本原理としました。<u>F 天皇は統治権を失い、国と国民統合の象徴になりました。</u>かわって、国民を代表する国会が国権の最高機関になり、内閣が国会に責任を負う議院内閣制が導入されました。

比較 〔下線部 A〕 ・憲法の改正案は、GHQ が作成し、日本に認めさせたと記述されている。 〔下線部 B〕 憲法改正や再軍備などを主張する声があり、現在まで議論になっていると記述されている。	〔下線部 C〕 GHQ が作成した憲法草案をもとに、日本に修正をうながしたと記述されている。 〔下線部 D〕 象徴天皇制について、記述されている。	〔下線部 E〕 GHQ の案を受け入れ、日本が改正案を作成したと記述されている。 〔下線部 F〕 象徴天皇制、国民主権にもとづく議院内閣制についても記述されている。
---	---	--

日米安全保障条約

	育鵬社 (P259)	帝国書院 (P244)	東京書籍 (P248～)
教科書記述	・独立回復の交渉も進められ、1951 (昭和 26) 年 9 月、吉田首相はサンフランシスコ講和会議に出席し、アメリカなど 48 か国 (ソ連、中国は不参加) とサンフランシスコ平和条約を結びました。同時に、<u>アメリカと日米安全保障条約 (安保条約) を結び、占領終了後も国内にアメリカ軍基地が残ることになりました。</u>翌年 4 月に平和条約が発効し、わが国は独立を回復しましたが、沖縄や奄美、小笠原諸島ではアメリカによる統治が続きました。	・この条約で、日本の領土の範囲が決められました。また、戦争の賠償については、スリランカからの提案もあり、大半の国は日本が多額の支出にたえられないと考えて、賠償を求めませんでした。この会議とあわせて、日本とアメリカとの間に<u>日米安全保障条約 (安保条約) が結ばれ、日本はアメリカ軍が引き続き国内に軍事基地 (施設および区域) をおくことを認めました。</u>	・占領の長期化が反米感情を高めることをおそれたアメリカは、日本との講和を急ぎました。1951 年、吉田茂内閣はアメリカなど 48 か国とサンフランシスコ平和条約を結びました。しかし、東側陣営の国々や、日本が侵略した国々の多くとの間では講和が実現しませんでした。 それと同時に、<u>吉田内閣はアメリカと日米安全保障条約 (日米安保条約) を結びました。</u>これによって、日本の安全と東アジアの平和を守るという理由から、<u>占領終結後もアメリカ軍基地が日本国内に残されることになりました。</u>
比較	〔下線部 A〕 安保条約により、占領終了後にも国内に米軍基地が残ることになったと記述されている。	〔下線部 B〕 安保条約により、国内に米軍基地を置くことを日本が認めたと記述されている。	〔下線部 C〕 安保条約により、日本の安全と東アジアの平和を守る理由で、占領終結後にも米軍基地が残ることになったと記述されている。

東日本大震災

	育鵬社 (P272～)	帝国書院 (P260)	東京書籍 (P262)
教科書 教科書記述	・1995 (平成7) 年の阪神・淡路大震災に続き、2011 (平成23) 年には、東日本大震災がおこりました。三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震によって東北や関東の太平洋岸を大津波が襲い、^A死者・行方不明者は2万人近くに達しました。^B被災地の人たちの公共心やがまん強さ、責任感などは世界からたたえられました。また、津波などによっておきた福島県の原子力発電所の事故のために、多くの周辺住民が避難生活を送らなければならなくなり、^Cこれからのわが国のエネルギー政策をどうすべきか議論がされています。	・2011年3月11日、東北地方の太平洋沖を震源とする、日本の観測史上最大の地震が起こりました。地震のあと、東北地方を中心に津波が襲い、^D死者・行方不明者は合わせて1万8千人以上という大きな被害が出ました。多くの人が家を失い、街全体に大きな被害を受けた地域もありました (東日本大震災)。また地震と津波により、福島県の原子力発電所で事故が起こり、放射性物質が外部にもれ出しました。^E放射性物質の広がりには人々に健康や食品への不安を引き起こしました。周辺住民たちの避難や、がれきや汚染水などの処理は現在も続いています。	・^F深刻な被害をもたらした1995 (平成7) 年の阪神・淡路大震災や2011年の東日本大震災は、私たちに^G防災やエネルギー面での課題に気づかせる一方で、^H地域の絆とボランティア活動の重要性を明らかにしました。被災地の復興や防災対策などを進めるとともに、一人一人が積極的に社会に参画して助け合う日本を創っていくことが求められています。
	・〔下線部A〕 死者・行方不明者数を2万人近くと記述されている。 ・〔下線部B〕 被災地の人々のふるまいが、世界からたたえられたと記述されている。 ・〔下線部C〕 原発事故の影響として、エネルギー政策の転換が議論されていると記述されている。	・〔下線部D〕 死者・行方不明者数を1万8千人以上と記述されている。 ・〔下線部E〕 原発事故の影響として、放射性物質の広がりによる食品や健康への不安について記述されている。	・〔下線部F〕 「深刻な被害をもたらした」と具体的な数字が記述されていない。 ・〔下線部G〕 原発事故の影響として、防災やエネルギー面での課題に対する気づきについて記述されている。 ・〔下線部H〕 ボランティア活動が果たした役割について記述されている。
比較			